



**AlphaRalpha Alley**




**Faeries Wear Boots: Oth**  
**-THE TIES THAT BIND-**

身体の奥を刺激する振動に緊張感とそれ以上の酔いを感じながら、  
こんなものを挿れているのを他のクルーに気づかれないかとドキドキしながら、  
わたしはブリッジに向かいます。

……でも残念です。  
すぐに気づかれてしまいました。





「こんなものを仕込んだままで勤務とか、艦長はとんだド変態ですね」  
あっさりと発見されたローターを引き出され、  
下着を履いていないことまでバレてしまいました。  
見咎めたクルーの、呆れたような、蔑むような眼差しに、  
わたしの中のいやらしい期待が高まります。

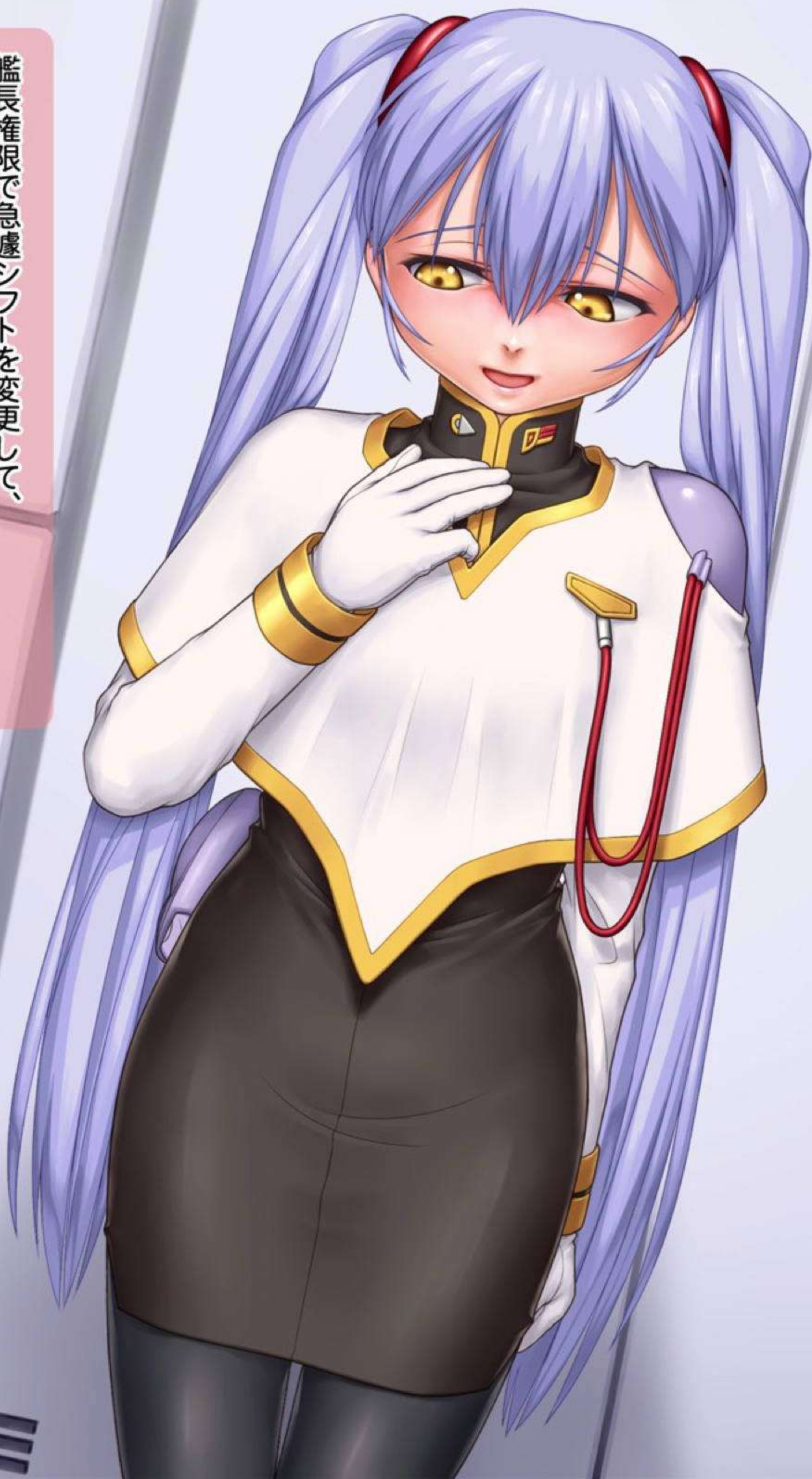


挿れていたローターという動かぬ証拠を突きつけられ、  
たじろいだわたしは思わずしゃがみこんでしまいます。

「ド変態の艦長さんにはお仕置きをしないといけませんね」  
見下しながら放たれたそんなクルーの言葉に、わたしは頷いていました。  
……胸の奥でいやらしい期待をしながら。



艦長権限で急遽シフトを変更して、『おしおき』をされにクルーの部屋に向かいます。



晒した肌を感じるクルーの視線が、  
『おしおき』への期待感が、わたしの身体を震わせます。



わたしの身体がロープで締め上げられていきます。  
ロープに寄せられた肉が普段とは違う形を描いて、  
自分の目に映る身体が、なんだか自分のものじゃないような  
そんな不思議な感覚を覚えます。





腕も後ろで縛り上げられ、  
身体の自由がどんどん奪われていきます。  
あとはもうなされるがまま、  
おしおきに身を委ねるしかありません。





こうして脚を吊り上げられてしまえば、腿を閉じてエッチな部分を隠すことも出来ません。はしたないくらいにすべて丸出しです。


すべてが晒されたわたしの身体に突き刺さるようなクルーの視線。だんだんと熱さを帯びていきます。見られていることを意識させられたわたしの身体は、

A blue-haired anime girl with yellow eyes is shown from the waist up, hanging from a red rope. She is wearing a red rope bikini. Her expression is one of surprise or discomfort, with her mouth open and a blush on her cheeks. The background is a plain, light-colored wall.

股間に食い込んでいたロープが広げられ、僅かに隠されていた部分も露わにされました。もうかなりの熱を持ったソコが空気に晒され、余計にその熱さを意識させられます。




『縛られただけでこんなに尖らせて、まったくいやらしい艦長ですね。恥ずかしくもないんですか?』  
クルーがわたしの敏感な部分を指先でこねるようになじりながら、  
イジめるように問いかけてきます。



指の刺激を受けたわたしのオ○ンコが、とろとろとよだれを垂らし始めます。  
見られて恥ずかしいのはいやらしい気持ち刺激するスパイスに、  
縛られて動けないことは淫らな欲に身を任せる言い訳に。



上体を吊っていたロープが緩められ、からだの前倒されます。  
自然とお尻を突き出し、  
自分から男性を誘うようないやらしいポーズを晒すように。



突き出されたお尻の奥のちいさな窄まり。  
今ではもうもう一つの性器となったソコを、クルーの指が捏ね、ほぐします。  
すっかり広げられたお尻の穴は指二本を簡単に飲み込んで、  
もっととねだるような疼きをわたしの頭に伝えてきます。

吊られたままで色々なところを存分にほぐされたあと、わたしは床に跪きました。  
そして目の前に突き出されたオチンチンに、ゆっくりと丹念に舌を這わせてゆきます。  
わたしに喜びをもたらしてくるもの、男性の象徴であるソレに奉仕するように。





わたしはさらにその太いオチンチンを啜え、舐めしゃぶります。  
わたしの口には余るほどのソレの熱さや大きさを確かめるように。  
子供が飴に夢中になるように……。



オチンチンへの奉仕がわたしの身体にさらなる火を灯します。  
糸を引いて床に滴りそうなほどよだれを垂らすオ○ン○。  
ソレを見せつけるようにわたしは脚を開き、  
媚びるような、誘うような痴態を晒します。





でもこれは「おしおき」ですから、ただわたしを気持ちよくしてくれるわけじゃありません。  
艦長の仕事を蔑ろにしそうになった責任を果たすために、  
わたしはオチンポに奉仕しなくてははいけないんです。

こんな……風にっー!





でも、始めてしまえばあとは肉の本能に従うだけ。  
お互いオチンポとオ○ンコに支配されて、  
腰を打ち付け合っんです。



そしてお尻でもオチンポ様を受け入れます。  
当然です。

だってソコはもう「性器」ですし、  
なによりこれは「おしおき」なんですから。

そして背中が折れそうなほど奥へ突きこまれながら、  
からだの奥深くで精を受け止めて、  
今回の「おしおき」は終わりました。





からだに刻まれたロープの痕。

愛しくも思えるこの「しるし」も、数日も経てば消えてしまおうでしょう。

今わたしの心を満たしているこの充足感といっしょに……。

……そうしたらまた、「おしおき」してもらおう方法を考えなくてはいけませんね。

End







縛られること、束縛されること。  
……それを「言い訳」にして、  
電子の妖精は今日も淫らに舞い踊る。

**Caution! For Adult Only**